

## エフェソ書の教会観について

著者	花咲 一利
雑誌名	研究論集
巻	74
ページ	111-119
発行年	2001-08
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00006358">http://doi.org/10.18956/00006358</a>

## エフェソ書の教会観について

花 咲 一 利

### I 序

エフェソ書は、いわゆる第二パウロ書簡と呼ばれる書簡の一つであるが、この書簡には独自の教会観が述べられている。特に「キリストの体  $\sigma\theta\mu\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon$ 」として教会共同体を表す理解は、このエフェソ書の教会観を特徴づけている<sup>1)</sup>。

しかしながら「キリストの体」としての教会理解が、エフェソ書にのみ特徴的な教会観というわけではない。パウロは、かつてコリント教会へ宛てた書簡の中で、主の晩餐（逾越しの食事）における「キリストの体」理解を述べていた。

まず彼は、偶像崇拜を禁じる10章において、聖餐論的理解の基になる理解を「キリストの体」を用いて述べている。

「わたしたちが裂くパンは、キリストの体  $\sigma\theta\mu\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon$  にあずかることではないか。パンは一つだからわたしたちは大勢でも一つの体です。」

(一コリ10:16-17)

この一コリ10:17aにおいて、パウロは「パンは一つ」と聖餐論的理解を示すと共に、続く10:17bでは「わたしたちは一つ」と、教会論的な「キリストの体」理解を示している<sup>2)</sup>。すなわち、教会共同体(Gemeinde)としての「キリストの体」理解が、既にこの10章で述べられているのである<sup>3)</sup>。

そして続く一コリ11:23ff. において、「主の晩餐」の制定の中に示されている、主イエスがパンを取り、裂いた後のいわゆる制定語の中に「キリストの体」理解を見ることができる。

「これは、あなたがたのためのわたしの体  $\sigma\theta\mu\alpha$  である。」(一コリ11:24) この体は身体的・物質的な体ではなく、まさに聖餐によって指し示される教会共同体を述べているのである<sup>4)</sup>。

さらに一コリ12:12ff., 27ではより明確に教会共同体を示す「キリストの体」理解を展開している。ここでパウロが「体  $\sigma\theta\mu\alpha$ 」を用いて、教会論とキリスト論とを関連させているこ

とが注目される。そして、この「キリストの体」理解は、後述するエフェソ書1:22f. に影響を与えた理解でもあるが、その他の第二パウロ書簡の「キリストの体」にも影響を与えたキリスト理解でもある。なお、一コリ12:12-27とロマ12:4ff. は、内容的に平行しており<sup>5)</sup>「キリストの体  $\sigma\omega\mu\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon$ 」という理解は、彼が教会の倫理観を述べる場合<sup>6)</sup>とは異なり、彼の教会観を示すものの一つとなっている。

以下において、エフェソ書の教会観について、キリストの体としての教会、一つ(としての)教会理解について検証していくものとする。そしてエフェソ書における教会観の持っている意義と、またそこから今日の教会理解において指針となるものを導き出したいと考える。

## II キリストの体 ( $\Sigma\omega\mu\alpha\ \tau\omicron\upsilon\ \chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon$ ) としての教会

パウロの「キリストの体」理解を発展させたものが、エフェソ書における「キリストの体」理解であり、本書の教会観にとって重要な理解となっている。またパウロの「キリストの体」理解にはなかった教会観を、このエフェソ書ではそのうちに述べているという点で独自性を示している。

このエフェソ書では「キリスト=教会の頭  $\kappa\epsilon\phi\alpha\lambda\eta$ 」理解を、「キリストの体」に結びつけることを試みている。それは1:20-23のキリスト讃歌において、まず示されることになる。この小さなキリスト讃歌は、この讃歌に先立って置かれている、いわゆる「書簡序文賛辞歌 *Briefeingangseulogie*」であるエフェ1:3-14の大きなキリスト讃歌<sup>7)</sup>とも、また他の書簡キリスト讃歌ともキリスト理解において異なっている<sup>8)</sup>。

例えば、このエフェソ書との関連が指摘されているコロサイ書のキリスト讃歌(1:15-20)では、キリストの先在(1:15)、創造における仲介や保持(1:16, 17b)、受肉(1:19)、十字架の死(1:20a)などが述べられる。他方このエフェ1:20-23のキリスト讃歌は、キリストの復活から始まり(1:20a)、高举(1:20b)、そして最後に「キリストの体」に示される教会観が述べられる点において、他のキリスト讃歌とは際立った相違を見せているのである<sup>9)</sup>。

「キリストをすべてのものの上にある頭  $\kappa\epsilon\phi\alpha\lambda\eta$ ν(として) 教会に  $\tau\eta\ \acute{\epsilon}\kappa\kappa\lambda\eta\sigma\iota\alpha$  お与えになりました。」(1:22)

「頭  $\kappa\epsilon\phi\alpha\lambda\eta$  としてのキリスト(1:22b)」が、神によって教会に与えられたと、明確にキリストの頭を教会論的に述べている。そしてこの理解の背後には同様の問題を抱えていたコロサイ書の2:18以下の「天使礼拝」の存在を考慮することができる。そこではコロサイ教会の問題に対して、キリストの「頭  $\kappa\epsilon\phi\alpha\lambda\eta$ 」を用いて答えようとしている。コロ2:18f. では、コロサイの教会で「天使礼拝」<sup>10)</sup>を行なうユダヤ人キリスト者たちに対して、「頭

κεφαλήであるキリストにしっかりとついていない(コロ2:19)」と、「キリストの頭」を教会に結びつけ、教会論的な批判を展開している。この頭理解は、コロサイ書の著者が、自らの著作であるコロサイ書に採用したキリスト讃歌(コロ1:15-20)から取り入れた理解である。

「御子はその体である教会の頭です。(同1:18)」というキリスト讃歌の一節は、キリスト理解に、教会理解を結びつけるものとなっている。コロサイ書の著者はこのキリスト讃歌の理解を取り入れ、「キリスト=頭 κεφαλή」という理解で、万物の支配者としてのキリストを示し、同時に「天使礼拝」批判を述べる根拠としているのである<sup>11)</sup>。

コロサイ教会と関係の深いこのエフェソ教会宛ての本書においても、同様の理解を示していると考えられる。エフェ1:21に述べられる「すべての支配、権威、勢力、主権」は天使の属性である。讃歌は、キリストをその上に置くことで、「頭 κεφαλή」によって、天使たちを含む万物の支配者としてのキリスト理解を示しているからである<sup>12)</sup>。

なおこのエフェソ書1:22までには、パウロ書簡のような「キリストの体」としての教会理解は、明確には述べられてはいない。むしろキリスト讃歌自身には、キリスト理解において教会論的な関心はみられないのである。つまりこの理解は、讃歌を採用したエフェソ書の著者によって付加された理解であるといえよう。

「教会はキリストの体 σῶμα αὐτοῦ (= τοῦ Χριστοῦ) である(エフェ1:23a)」の句はパウロ的な教会理解であり、この1:23は、本来の讃歌にはない編集句であると考えられる<sup>13)</sup>。その理由は前節22節とのキリスト理解の相違にあるといえる。22節の理解は「キリスト=教会の頭 κεφαλή」という理解であり、キリスト=教会という理解を示してはいない。22節のキリスト理解は、あくまでもキリストは教会の頭ではなく教会を統括する者としての「頭 κεφαλή」=キリストという理解である<sup>14)</sup>。しかし続く1:23において「キリストの体 σῶμα τοῦ Χριστοῦ=教会」と理解している。この22-23節のキリスト理解は、全く矛盾するというわけではないが、その教会観において微妙な違いをみせているのではないかと考える<sup>15)</sup>。「頭 κεφαλή であるキリスト」と「キリストの体である教会」というエフェソ書独自のこの教会観は、4章の「キリストの体」は「一つ」という教会観に、発展的に述べられておりその中においてこの問題を再考することとする。

なお1:23bで、教会は「すべて(万物 τὰ πάντα)」を「満たすもの(プレローマ τὸ πλήρωμα)」であるという理解が付加されている。この理解はこのエフェソ書の著者の教会観である<sup>16)</sup>。また「すべて」と「満たす」という理解を結びつけるこの理解は、4:10ではキリスト理解にも用いられている。

「この降りてこられた方(=キリスト)が、すべてのものを満たすために、もろもろの天よりも高く昇られたのです。」エフェソ書の著者は、教会=キリストであることを、この「すべて」のものを満たすもの(プレローマ)で示しているのである。

### Ⅲ 一つの教会

エフェソ書は、教会におけるユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者との問題を解決するための手掛かりとして、教会は「一つ」という理解を提示している。ここにおいても「キリストの体」理解が深く関わっている。2：11-22は、A. Lindemannによれば、この書簡全体の神学的論争の中心点である<sup>17)</sup>が、確かにこの箇所において、著者は、本書の目的の一つである十字架による和解を述べている。そしてこの中で「一つの教会」観は、キリストの体を手掛かりとして和解論との関係において示されている。

ここでは「キリストの体は一つ」であるように「教会も一つ」という教会観がみられる点が重要である。エフェソ書における「一つ、一致」への拘りは、エフェソ教会が抱える問題と関連している。前述したようにコロサイ教会と同様、エフェソ教会でも天使礼拝を行なうユダヤ人キリスト者に対して、1章のキリスト讃歌では「頭であるキリストのもとに一つにまとめられる」(1：10)、また「すべてのものの頭として教会に与えた」(1：22b)などと述べて、天使礼拝のような過ちから離れ、キリストのもと「一つ」になることをエフェソ教会に求めていた。そしてこの理解は、2：11ff. においてユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者を「一つ」にするという和解論に発展している。著者は、この両者の対立を解決するためにここで、キリスト・イエスによる和解を求めているのである。著者は、かつてパウロがロマ書9：1 ff. で問題としたイスラエルの選民問題を下敷きにしつつ、両者に和解を勧告している<sup>18)</sup>。

エフェソ書の著者は、イスラエルの民に属さない(2：12)異邦人キリスト者に向けて「キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となった」(2：13)と述べている。そして「(キリストは)二つのものを一つにした」(2：14)と両者の融和を示した後、和解論を述べている。すなわち「(キリストは)十字架を通して、両者を一つの体として *ἐν ἑνὶ σώματι* 神と和解させた」(2：16)というやはりエフェソ書独自の和解理解を述べている。ただ、この十字架による和解という点においては、パウロ的十字架理解を考えることができよう。

前述したコロサイ書のキリスト讃歌の最後1：20には「その十字架の血によって平和を打ち立て」ることが述べられ、十字架の血による和解を示しているが、ここにはまだキリストの体との関係において、和解論は述べられてはいない。一方、このエフェソ書2章においては、教会において「一つの体」として神と和解させたと明確に述べて、より教会論的理解を示しているのである。さらにこのエフェソ書2章では、成長してゆく教会理解をも示しており(2：21)、パウロからすれば次世代、第二世代にあたる恐らく80年代の教会の姿を示すものとなっているのであろう。

さらに、エフェソ書4章には「キリストの体」は「一つ」であるという、本書の教会観のま

とめともいうべき理解が述べられている。著者はここにたって2章から述べてきた「一つ」という教会観を、キリスト者に用いて、「一つ」となることを求めて(4:1-6)、それを教会におけるキリスト者の「一致 ἐνότης」としている(4:3, 13)<sup>19)</sup>。これはエフェソ教会のユダヤ人キリスト者、異邦人キリスト者いずれに対しても、著者がパウロの名を借りても、強く要求したかったことといえよう。それゆえ4:4の「体は一つ」という教会論的な理解を、エフェソ教会への勧告の言葉「一致を保つように努めよ」(4:3)の後に、強調する目的で述べていると考えられる。

さらに4:12以下では、パウロの理解を取り込みながらも、エフェソ書独自の「キリストの体」理解が述べられている。その理解は、特に4:15-16に示されている。

4:15 (私たちは) 頭 κεφαλή であるキリストに向かって成長してゆきます。

4:16 キリストにより、体 σῶμα 全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わされ、結び合わされて、おのおのの部分は分に応じて働いて体 σῶμα を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。

この二節は、教会を「成長してゆく体」と理解している点で、エフェソ書に独特の教会観を示している。この教会理解は、パウロの教会観を発展させたものとなっている。この点においても、本書がパウロ後の教会観を、そしてその状況を述べていると考えることができるであろう。それはエフェソ書と近い理解を示す、コロサイ書の教会観(コロ2:19など)が影響を与えているということ<sup>20)</sup>でもある。なお、このエフェソ書において、留意すべき点は、パウロが「体 σῶμα」を教会論的に述べる際に、「体 σῶμα」と「頭 κεφαλή」を強く結び付けて理解していなかったということである。パウロの教会観には、この体と頭をキリスト論的に、積極的に結びつけて理解するものはない。一方、このエフェソ書の著者は「キリスト=頭」というキリスト讃歌の理解を取り込みながら、それをパウロの「キリストの体」理解と結びつけようと試みていること、またこの理解は、「キリストの体」を十分に理解しておらず、「頭」と「体」をこのように結合させるキリスト理解には問題があるのではないかと考えた<sup>21)</sup>。

ただこのことに関して、エフェソ書の著者は、パウロの理解を知りながらも、教会の現実の問題に対して(それがどれだけ当時の現実の問題を反映していたのかは、十分に吟味しなければならぬが)、答えようとするあまり、必ずしもパウロ的にまた身体論的に適切な理解を示せなかったと考えられる。それよりもこの著者は、身体論的には、頭 κεφαλή と体 σῶμα は不可分であることを示し、教会論的には頭 κεφαλή であるキリストと、そのキリストの体 σῶμα τοῦ Χριστοῦ である教会に集うキリスト者とは、離れることのできない分ちがたい関係にあることを示そうと試みていると考えられる。それは本書が一貫して、頭であるキリストと、彼の体 σῶμα である教会との普遍的な関係性(1:22-23, 4:15-16, 5:23-24)を述べている点からも明らかである。このことが本書に独自のキリスト理解・教会観を

付加することになった理由の一つと考える。

#### IV 結論

以上、エフェソ書の教会観について、「キリストの体」としての教会と「一つ」としての教会理解を中心に検討した。本書ではまず1章のキリスト讃歌などにおいて「頭 κεφαλή であるキリスト」と「キリストの体 σῶμα τοῦ Χριστοῦ である教会」を結びつけて独自の理解を示している。この理解には問題もあるが、やがて2章におけるキリスト者の一致、一つである教会という教会共同体理解に発展していく。この一つなる教会理解は、今日の教会の問題（エキュメニカル問題など）に重要な示唆を与えているのではないか。そして4章の「キリストの体」は「一つ」という教会観には、同時に本書における教会観の特徴の一つ「成長する教会」理解が示されている。このことは教会の次世代、パウロからすると第二世代の教会共同体の反映、あるいは勧告・奨励の意味を持っているのではないか。同時に著者はその第二世代の教会共同体のキリスト者たちに、ある程度パウロ神学を継承する目的をもっていたと考えられる。「キリストの体」としての教会理解には、何よりもその思いが込められているといえるのではないか。

#### 注

本論文は第41回関西新約聖書学会（2000年6月12日 於 同志社大学）における研究発表に、加筆・修正を加えたものである。

（なお神学関連文献の略語は、基本的に Schwertner, S., *Theologische Realenzyklopädie, Abkürzungsverzeichnis*, Berlin·New York: Walter de Gruyter, 1976. に拠っている。）

- 1) この点に関しては、拙論「Σῶμα τοῦ Χριστοῦ (キリストの体) —エフェソ書の理解—」『関西外国語大学 研究論集』70号 1999年 200ページ以下参照。
- 2) Weiß, J., *Der erste Korintherbrief*, Kritisch-exegetischer Kommentar über das Neue Testament (Abk. KEK). K, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1910<sup>9</sup>/1977 (9 vollig neubearb. Aufl. 1910), S.259. Wendland, H.-D., *Die Briefe an die Korinther*, Das Neue Testament Deutsch (Abk. NTD). 7, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1980<sup>15</sup>, S.81. Conzelmann, H., *Der erste Brief an die Korinther*, KEK.V, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981<sup>13</sup>, S.210f. Wolff, Chr., *Der erste Brief des Paulus an die Korinther*, Theologischer Handkommentar zum Neuen Testament (Abk. ThHK). VI/2, Berlin: Evangelische

Verlagsanstalt, 1982<sup>2</sup>, S.53f.

- 3) Schweizer, E., *σωμα, κτλ.* in *Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament*(Abk.ThWNT).VII, Stuttgart: W. Kohlhammer, 1960, S.1067f.
- 4) cf. Schweizer, E., *σωμα*, in *Exegetisches Wörterbuch zum Neuen Testament*(Abk.EWNT.).III, Stuttgart: W. Kohlhammer, 1983, Sp.778.
- 5) Weiß, H.-F., "Volk Gottes" und "Leib Christi". Überlegungen zur paulinischen Ekklesiologie, *Theologische Literaturzeitung*(Abk.ThLZ).102, 1977, Sp.412.
- 6) 彼は、ロマ書ではしばしば「体」を教会の倫理観を述べる際に用いている。例えば、「わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体 *σωμα* が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。(ロマ6:6) ……従って、あなたがたの死ぬべき体を罪に支配させて、体の欲望に従うようなことがあってはなりません。(同6:12)」など、彼は教会の倫理問題において単に体の意味で用いる場合も多い。(ロマ1:24, 8:10ff., 12:1, コリ6:13ff., 7:4, フィリ1:20など)

cf. Wilckens, U., *Der Brief an die Römer*, Evangelisch-katholischer Kommentar zum Neuen Testament (Abk.EKK).N/1, Zürich/Neukirchen-Vluyn: Benziger/Neukirchener, 1978, S.18. Althaus, P., *Der Brief an die Römer*, NTD.6, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978<sup>13</sup>, S.62ff. Michel, O., *Der Brief an die Römer*, KEK.IV, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1978<sup>14</sup>, S.209. Käsemann, E., *An die Römer*, HNT.8a. Tübingen: J.C.B. Mohr, 1980<sup>4</sup>, S.161. Strack, H.L.u. Billerbeck, P., *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*.III, München: C.H. Beck, 1994<sup>9</sup>, S.62f. usw.

- 7) 讃歌の最初に置かれる言葉 *εὐλογητός* (賛美) によってこう呼ばれている。apud Dahl, N.A., Adresse und Proömium des Epheserbriefes, *Theologische Zeitschrift*.(Abk.ThZ)7, 1951, S.250f. Schnackenburg, R., *Der Brief an die Epheser*, EKK.X, Zürich/Neukirchen-Vluyn: Benziger/Neukirchener, 1978, S.58. Sellin, G., Über einige ungewöhnliche Genitive im Epheserbrief, *Zeitschrift für die neutestamentliche Wissenschaft*(Abk.ZNW).83, 1992, S.56. cf. Schnackenburg, R., Die große Eulogie Eph 1, 3-14. Analyse unter textlinguistischen Aspekten, *Biblische Zeitschrift*(Abk.BZ).21, 1977, S.67ff.
- 8) Deichgräber, R., *Gotteshymnus und Christushymnus in der frühen Christenheit*, Studien zur Umwelt des Neuen Testaments(Abk.StUNT).5, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1967, S.163. による「キリスト讃歌におけるキリストの属性に関する表」に、加筆修正したものを以下に示す。なお [ ] 部分は本来の讃歌には含まれない。

キリストに関して	コロ1	ヘブ1	ヨハ1	フィリ2	一テモ3	一ペト2	一ペト3	エフェ1	エフェ1
先 在	1, 15	1, 3a	1, 1.2	2, 6a				1: 4	
創造における仲介	1, 16	[1, 2c]	1, 3						
創造の保持	1, 17b	1, 3b							
受 肉	1, 19		1, 10.14	2, 6b-7	3, 16				
					Aα				



キリストに関して	コロ1	ヘブ1	ヨハ1	フィリ2	一テモ3	一ペト2	一ペト3	エフェ1	エフェ1
受 難		1, 3c	1, 11	(2, 8)		2, 21f.	3, 18a	1: 7a	
十字架の死(死)	1, 20a			2, 8		2, 24a	3, 18b		
復 活	1, 18b				3, 16		3, 21		1, 20a
					A β				
高 拳		1, 3d		2, 9a					1, 20b
昇 天					3, 16		3, 22a		
					C β				
和解=救済	1, 20b					2, 24b	3: 21a	1: 10a	
すべての名にまさる名	[1, 4]	(1, 12)		2, 9b					1, 21
力による服従	[1, 6]			2, 10f.			3, 22b		1, 22a
主				2: 11					
宣教(教化)					3, 16		3, 19		
					B β C α				
教会(かしら)	1, 18a							1: 10b	1, 22b
教会(キリストの体)					(3, 16)				[1, 23a]
教会(満ちている場)					C α				[1, 23b]

- 9) 上記の「キリスト讃歌におけるキリストの属性に関する表」に見られるように、キリストの属性として「頭」と「キリストの体」を持っているのはエフェ1:20-23の讃歌のみである。(ただし1:23は、キリスト讃歌へのエフェソ書の著者による編集句と考えられる。)
- 10) Carr, W., Two Notes on Colossians, *Journal of Theological Studies* (abbr. *JThS*). XXIV, 1973, p.292ff.
- 11) この点に関しては、「キリスト讃歌における天使概念」『関西外国語大学 研究論集』67号 1998年 291, 293ページ参照。
- 12) Strack, H.L.-Billerbeck, P., *op.cit.*, S.581ff. は、エフェ1:21の「支配」などの概念が旧約、旧約偽典(レビの遺言、エノク書等)などユダヤ的背景の下に記されていることを示している。
- 13) Deichgräber, R., *op.cit.*, S.162f. はじめ、エフェソ書の研究者は概ね1:23を編集句と考えている。
- 14) Fischer, K.M., *Tendenz und Absicht des Epheserbriefes*, *Forschungen zur Religion und Literatur des Alten und Neuen Testament* (Abk.FRLANT).111, Göttingen: : Vandenhoeck & Ruprecht, 1973.S.53. では、後述するエフェ4:15, 5:23と1:22は同様の理解を示すとされるが、頭 κεφαλή 理解において、同じとは考えられない。
- 15) この点に関しては、拙論「Σωμα τοῦ Χριστοῦ (キリストの体) —エフェソ書の理解—」203ページ以下参照。
- 16) エフェソ書と関係の深いコロ1:19の「満ちあふれるもの τὸ πλήρωμα」でさえ、必ずしも教会論的理解を示してはいないのである。
- 17) Lindemann, A., *Die Aufhebung der Zeit. Geschichtsverständnis und Eschatologie im Epheserbrief*, StNT.

- 12, Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, 1975, S.145.
- 18) 特にロマ9：4の「契約  $\delta\epsilon\alpha\theta\acute{\eta}\kappa\eta$ 」を、エフェ2：12用いて、イスラエルの選民問題をエフェソ教会の問題としている。apud ders., *Paulus im ältesten Christentum*, BHTh.58, Tübingen: J.C.B. Mohr, 1979, S.124.
- 19) *Schnackenburg, R., Der Brief an die Epheser*, S.166.
- 20) ders., *ibid.*, S.191. もちろんパウロの「 $\sigma\omega\mu\alpha$ 」理解（例えば、ロマ12：4 ff.、コリ12：12ff. など）が、ここにも反映していることは十分に考えられるし、特に一コリ12：12ff. の理解は、このエフェソ書4章のキリスト論に影響を与えていると理解できよう。
- 21) 拙論 前掲書 204ページ以下参照。